2019

第 17 回　群馬県図書館大会

報告書

令和２年１月３０日（木）

会場：群馬県立図書館

目次

全体報告……１

記念講演
「書き手と図書館、出版社と図書館、
そして市民と図書館」（永江　朗 氏）…４

第１分科会報告
「人を魅（ひ）きつける図書館サービス」……6

第２分科会報告
「リポジトリ JAIRO　Cloud 移行ワークショップ」……１２

参加者の声……２４

※ 講師等の発言は、大会当日1回限りを前提とした発言内容を事務局及び分科会検討会で要約したものです。転載･2次利用は固くお断りいたします。

１　全　体　報　告

事 業 名	第１７回　群馬県図書館大会
日　　時	令和２年１月３０日（木）　１０：００～１６：３０
会　　場	群馬県立図書館
主　　催	群馬県図書館協会（群馬県立図書館、群馬県公共図書館協議会、群馬県大学図書館協議会、群馬県高等学校教育研究会図書館部会、群馬県小中学校教育研究会学校図書館部会）
後　　援	群馬県教育委員会
大会テーマ	新時代の図書館　～令和の図書館を創造する～
日　　程 ・ 内　　容	１ 式典（１０：００～１０：３０）（群馬県立図書館　ホール） (1)主催者挨拶 群馬県図書館協会　会長　中山　勝文 (2)来賓祝辞 群馬県教育委員会　教育長（代理）　飯塚　裕之（教育次長） 群馬県議会　副議長　井田　泉 (3)後援・加盟団体紹介 群馬県教育委員会生涯学習課　課長　福田　芳美 群馬県公共図書館協議会　会長　石崎　治 （館林市立図書館　館長） 群馬県大学図書館協議会　会　長　田中　麻里 （群馬大学総合情報メディアセンター長） 群馬県高等学校教育研究会図書館部会　部会長　竹澤　敦 （群馬県立太田フレックス高等学校　校長） (4)表彰式 ①優良図書館群馬県教育委員会表彰 安中市図書館（安中市） ②群馬県読み聞かせボランティア顕彰 古巻読書ボランティアまざーぐーす小学校部（渋川市） 新町図書館おはなしの会（高崎市） 桐生市立東小学校　読み聞かせボランティア（桐生市） 太田市立太田東小学校　読み聞かせボランティア（太田市） 館林市立美園小学校　読み聞かせ　ぽんぽこ（館林市） ひばりの会（邑楽町） ③優良読書グループ表彰受賞グループ 館林市立図書館　読み聞かせボランティア「にじの会」（館林市）

日　程
・
内　容

（安中市図書館）

（古巻読書ボランティア　まざーぐーす小学校部）

（新町図書館おはなしの会）

（桐生市立東小学校　読み聞かせボランティア）

（太田市立太田東小学校　読み聞かせボランティア）

（館林市立美園小学校　読み聞かせ　ぽんぽこ）

（ひばりの会）

（館林市立図書館　読み聞かせボランティア「にじの会」）

日　　程 内　　容	２ 記念講演（１０：３０～１２：００） 「書き手と図書館、出版社と図書館、そして市民と図書館」 永江　朗　氏　（フリーライター・日本文藝家協会理事） ３ 昼食・休憩（１２：００～１３：３０） ４ テーマ別分科会（１３：３０～１６：３０） 第１分科会（群馬県立図書館　ホール） 「人を魅（ひ）きつける図書館サービス」 講義：「魅せる図書館をつくる」 ワークショップ：「ぐるぐる読書会」 伊達　深雪 氏（京都府立久美浜高等学校　学校図書館司書） 第２分科会（群馬県立図書館　研修室） 「リポジトリJAIRO　Cloud移行ワークショップ」 講演：「オープンサイエンス，次期JAIRO　Cloudの状況について」 安達　修介 氏（JPCOAR人材育成作業部会・横浜国立大学） ワークショップ：「JAIRO　Cloud移行作業デモ」 下城　陽介 氏（JPCOAR人材育成作業部会・上越教育大学）
参加者数	延べ人数：３２０人（式典･記念講演１７４人、分科会１４６人） （2018年度実績２９９人　　１７０人　　１１１人）
評　価 反　省 そ の 他	記念講演では、永江氏から出版社、書き手、読み手、図書館というそれぞれの視点からの読書についてのお話があり、参加者アンケートからも「いろいろな立場で図書館と関わる方の貴重なお話を聞けてよかった。」「これからの図書館サービスをどう考えるべきかについて考えるきっかけやヒントをもらえた。」などの意見が多く寄せられ、参加された方々も満足されたようである。 第1分科会は、第１部を講義、第２部をワークショップという２部構成で行われた。講義では、Library of the Year 2019で、学校図書館として初めて優秀賞を受賞した京都府立久美浜高校の伊達深雪さんが実践例をたくさん紹介してくださった。ワークショップでは、少人数のグループで、「ぐるぐる読書会」を行った。参加者からは、「図書館ができること、可能性が広がった。たくさんの実践例を紹介していただき、自館でもできることを取り組んでいこうと思った。ぐるぐる読書会、楽しかったです。」「大変盛りだくさんで、実りのある分科会だった。今日参加できてよかった。」などのご意見が寄せられた。 第２分科会では、JAIRO Cloudを利用してリポジトリを構築予定の機関を対象に、現行システムからの移行作業を学ぶワークショップを開催した。オープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）から講師をお招きし、リポジトリを取り巻く最新動向の紹介と、JAIRO Cloudへの移行作業デモを行った。参加者からは、「移行手続きについてわかりやすく説明していただき、理解することができた。」「今後、移行をどのように進めるか悩んでいたので、こういう機会を設けていただいてありがたかった。」「移行デモを見せていただいて、マニュアルを読むだけではつかめないイメージをつかむことができて助かりました。」などのご意見が寄せられた。 両分科会とも、分科会検討委員が臨機応変に対応しながら運営し、会場設営、研修内容ともに充実していた。 大会運営については、県立図書館職員に「運営マニュアル」を配付し、係ごとに準備を進めた。職員の臨機応変な対応により、大会の日程はスムースに進行し、予定通りに全日程を終了することができた。 当日は、上毛新聞社が取材に訪れた。

第１７回　群馬県図書館大会記念講演（概要）

「書き手と図書館、出版社と図書館、そして市民と図書館」

永江　朗　氏（フリーライター・日本文藝家協会理事）

■はじめに

映画「ニューヨーク公共図書館」は、ニューヨーク公共図書館の舞台裏を追ったドキュメンタリー映画である。多様なコレクション、丁寧なレファレンス、研究者による講演会のほか、ロックコンサートやお年寄り向けヒップホップダンスのワークショップなどを行う様子が描かれている。小説「夢見る帝国図書館」（中島京子著）は、明治にできた日本初の図書館の物語。また「炎の中の図書館」（スーザン・オーリアン著）は、１９８６年のロサンゼルス中央図書館の大火を描いたノンフィクション。これらの映画や書物からは、「図書館は図書館員のものではない、市民全員のものである」ということが伝わってくる。

自分にとっての図書館は、「考える」「楽しむ」「調べる」「学ぶ」ということができる場所である。１番は「考える」場所である。

■書き手と図書館

書き手と図書館の関係について考えてみよう。「自分が書いた本が図書館にないのはいやだけど、タダで貸し出されるのは・・・」というのが書き手の本音である。書き手にとってみれば、図書館が置いてくれるからこそ本を出すことができるのである。一言で書き手と言っても、様々な立場がある。書いて食べている人、ほかに職業がある人、本を職業に利用している人などである。

図書館利用者は、書き手のことについて、もっと思いを巡らせてみてもよいのではないか。

■出版社と図書館

「本が売れない、犯人は誰だ？」という議論がある。町の本屋の売上げが伸びないのは、ブックオフやアマゾンなどの進出による図書資料購入先問題が原因なのだろうか。「図書館栄えて、作家滅ぶ」という言葉のように、公共図書館に関わる副本問題や文庫本問題が原因なのだろうか。なぜ本は売れないのか、という問いに対して、本そのものに原因はないのか、という素朴な疑問を持つことがある。「知の拠点」としての図書資料の地位が、低下しているということはないだろうか。

本の売上げが伸びない背景の一つとして、出版不況ということが挙げられる。新刊市場は、人口減少に伴い縮小化しているのである。生産年齢人口（１５歳～６４歳）と書籍販売冊数の関係をグラフで表すと、生産年齢人口の減少に対応して本が売れなくなっていることが分かる。

一方、書籍推定販売部数と個人向け貸出し冊数の関係をグラフで表してみると、販売冊

数が貸出し冊数を上回っていた状況がしばらく続いていたが、２０１０年を境に貸出し冊数が販売部数を上回るという現象が起きている。逆転現象の要因は、販売部数の減少に依るのだが、貸出し冊数の増加に視点を当てれば、このことは、図書館利用者が多様化してきているからだと考えることもできる。

■市民と図書館

多様化する図書館について考えてみよう。図書館は、もはや「無料貸本屋」ではない。今、図書館に求められているのは、コミュニティーの核としての役割である。例えば、東京都のとある公共図書館は、午後１０時まで開館していて、学童が終わった子どもたちが、近隣の企業で残業する親を待つ姿が見られる。また、アメリカのロサンゼルス図書館では、ホームレスの人々に対してどのような対応ができるのか、ということを課題として取り上げているそうだ。人々に居場所を提供すること、これが図書館の大きな役割となっているのである。トニ・モリスンの言葉に「図書館は民主主義の柱」というのもある。

デジタル時代の図書館はどうあるべきなのだろうか。ニューヨーク公共図書館では、Ｗｉ－Ｆｉのルーターを貸し出すサービスがあるという（時間制限あり）。時代に合ったサービスが必要である。また反対に、デジタルの時代から遠ざけられている人のフォローをすることも、公共図書館の役割の一つとなるだろう。では、司書はＡＩに取って代わってしまうのだろうか。いや、ＡＩに司書はできない。なぜなら、司書が扱う書誌データのその向こうには、人間がいるからである。人間を扱う司書は、その職をＡＩが代わることはできないのである。

■おわりに

もっと図書館を知ってもらおう。予算を獲得する行政マンとしての図書館員が必要である。貸出冊数・利用者数だけではない尺度をもってほしい。

町を訪れた人が、あわせて図書館も訪れる、そのような形が理想である。

■Ｑ＆Ａ

Ｑ：　本を読まない人が増えている。本を読まないと想像力が養われないという危機感がある。このことについてお考えを聞かせてほしい。

また、図書館は変化しなければならない時代に来ている。図書館の名称自体を変えることについてどう思うか。

Ａ：　読書に関するデータからは、読書離れが進んでいるとは必ずしも言えないことがある。データをよく見ると、読み方が変化している、と考えることもできる。幼少期に読む習慣がついている人は、成人になってからもずっと読んでいることが多いが、現在も、読み聞かせボランティア等の活動が活発にあり、子どもたちが読書習慣を身につける機会は広まっていると感じている。したがって、本を読まない人が増えていて心配だとは思っていない。読書離れについては楽観視している。

図書館を核としながら、コミュニティーの場を構築していく時代になってきた。ネーミングもそれに伴い変化していくだろう。

Ｑ：永江先生のお考えになる「夢の図書館」についてお聞かせください。

Ａ：歩いて５分で行ける、資料がなければ取り寄せてくれる、相談したいことがあれば応じてくれる、これが理想の図書館である。

２－１　　分　科　会　報　告

分科会名	第1分科会
日　　時	令和2年1月30日(木)13:30～16:30
会　　場	群馬県立図書館　ホール
テ　ー　マ	人を魅（ひ）きつける図書館サービス
開催趣旨	図書館は、その全ての利用者（住民・学生など）のために存在する施設であり、図書館が収集する本や雑誌、ＣＤ等の資料からは、豊富な知識や生活に欠かせない情報、そして楽しみや喜びを得ることができます。しかし、実際には「図書館に足を運んでもらえた人」にしか、この貴重な財産が活用されていません。どうすればより多くの利用者に来館してもらえるかは、館種を問わず、図書館員にとって共通の課題です。資料展示や、講演会・ビブリオバトルといったイベントの開催だけに止まらず、図書館のそのポテンシャルをフルに活かして、様々な利用者の興味・関心を刺激し、惹きつける図書館を魅せる（＝さまざまな利用者の興味・関心を刺激し、惹きつける「魅せる図書館」の活動とは、どんなものなのでしょうか？ ライブラリー・オブ・ザ・イヤー2019（主催：ＩＲＩ知的資源イニシアティブ）の優秀賞に、学校図書館として初めて選ばれた京都府立久美浜高等学校図書館から講師を招き、その多彩な実践から図書館の魅せ方を学びます。
日程・内容	13:30～15:00　講義 「魅せる図書館をつくる」 伊達深雪氏　（京都府立久美浜高等学校　学校図書館司書） 15:10～16:30　ワークショップ 「ぐるぐる読書会」
参加者状況	合計　115人(含:スタッフ　11人)
係　分　担	講師:伊達深雪氏 司会進行:井上(太田フレックス高) 記録:梯（農二）・関口友（沼高）・田中（藤北）・荒井（下仁田高） 受付・会場:新道(渋川南小)・武部(上野村)・大澤(太田フレックス高)・市村(県立) 接待:関口(県立)・早川(県立)
配布資料	・レジュメ
評　価 反　省 そ　の　他	・伊達氏が生徒を魅きつけるために日々取り組んでいる数々の実践について伺ったが、それぞれが魅力的で、Wikipediaの活用など新しい取り組みもあり、学校図書館だけでなく公共図書館にとっても「魅せる図書館」を作るためのアイデアを与えてくれる内容の濃い講演だった。 ・ワークショップ「ぐるぐる読書会」は、参加者全てが初体験であったが、読んでいない初見の本を20分で読んで他者に説明するというスリリングな読書体験に参加者すべてが集中し取り組んだ。限られた時間の中で出来る読書イベントとして、参考になった。 ・多くの図書館が利用者の減少という課題を抱えるなかで、「人を魅（ひ）きつける図書館サービス」というテーマは多くの参加者を集めたが、皆さんに満足していただける充実した分科会にすることができた。

第１分科会「人を魅（ひ）きつける図書館サービス」
講義「魅せる図書館をつくる」

講師　伊達深雪 氏（京都府立久美浜高等学校司書）

第１分科会では、京都府立久美浜高等学校司書、伊達深雪氏を講師として迎え、「人を魅（ひ）きつける図書館サービス」をテーマにお話を伺いました。

０ はじめに

京都府立久美浜高等学校は、生徒数２３９名の少規模校ですが、明治時代から続く伝統校です。ただ、京都駅から一番北に位置する過疎地域であり、図書館サービスがどういったものかも知らない生徒が多い中、伊達氏は図書館利用について、日々いろいろな角度から働きかけを行っています。

１ 「魅せる」ってなんだろう？

「人を魅（ひ）きつける図書館」とは、誰もが「楽しい」と思える図書館です。しかし、誰にとっても魅力的で楽しいと思える図書館には、一定のルールが必要です。それを決めるのは誰なのかを考えたとき、「図書館利用者の心構え」また「図書館員の心構え」を考える必要があります。

「図書館利用者の心構え」としては、「お互いに気持ちよく過ごせる気遣い」が必要です。すべての利用者が気持ちよく過ごすためには、「他人に迷惑をかけない」ということが一番重要です。自分のどういった行為がほかの利用者にとって迷惑となるのかを考えることは、自分の行動を意識し、視野を広げる効果があります。また、「図書館員の心構え」としては、「図書館利用者」である生徒たちの視野を広げるために、常に周りを意識した行動を促すような間接的なアプローチを心掛けなければなりません。「自立心を育む場所が学校図書館である」ことを中心に据え、日々の図書館活動を行っていくと、生徒たちも自発的にいろんなことを考えるようになり、禁止ルールを設けなくても、「他人に迷惑をかける行為」をしなくなっていきます。

間接的なアプローチを行う中で、図書館員が生徒一人ひとりの心の声を聞くために、「全校アンケート」などを実施しますが、思っていても言わない、または言えない生徒もいます。また、図書館に関心がない人は回答すらしないという実態もあります。ですが、意見を言わないだけで、そういった生徒たちにも、もちろん、要望はあります。そもそも図書館の「価値」に気づいていないのです。図書館の「価値」に気づいてもらうため、「サイレントニーズ」を拾い上げ、図書館の「価値」に気づいていない生徒たちに、「新しい気づき」を提供する場が学校図書館であるべきです。

「図書館＝本を読む」と考えている生徒たちに、まずは図書館に足を運んでもらうことが重要と考え、久美浜高校では、タブレットやボードゲームなどを図書館内に置いています。本以外のいろいろなツールによって、生徒間で交流が生まれていき、結果的に図書館に足を向ける生徒が増えていきます。

もちろん、読書をする生徒もいるので、図書館における「読書センター・学習センター・情報センター」としての基本は変わりません。

２　インターネット時代の図書館を考える

インターネットにつながるパソコンがあるにはあるが、図書館での対応が紙媒体中心に偏りがちになっているのではないかという課題について考えてみます。月刊誌「学校図書館」に、若年層ほど電子書籍のほうが読みやすいと回答する比率が高いというデータ分析が載っています。（２０１８年１１月号Ｐ４４参照。）中高生の場合、電子書籍は浸透しつつあり、学校図書館の利用減少が読書量の減少と直接つながっているわけではないということも言えるのです。

図書館は読書・学習・情報それぞれを担うセンター機能を持つ場所です。その情報媒体が従来は書籍・雑誌・新聞でしたが、インターネットが入ってくるようになりました。

図書館員の使命を考えていく上で、インターネットの情報に出典情報をプラスしていこうという世界の活動もあります。それは「One Librarian One Reference」というもので「オンライン百科事典 Wikipedia」の信頼性を図書館員の手で高めようという運動です。

そして生徒のインターネット利用を考え、学校図書館でも電子図書館サービスの導入を始めました。「School e-Library」と「ピッケのつくるえほん」の導入です。特に後者のアプリは、創作してみる活動につながるもので、共通のアプリとしてほかの生徒が作った作品を見ることもできます。自分より素晴らしい作品を発見したり、みんなで読むこともでき、もっと面白い話を書こうという研究にも発展しました。コツは図書館を暇があれば行きたくなる「場」所にすることです。その本以外にも魅力的なものが提供できるかもしれない。利用者にとっては、かもしれない、あるかもという期待が生まれることが、図書館に足を運ぶきっかけになります。この事例は、「読書のきっかけはどこにでもある」ということを示しています。インターネットをプラスアルファと捉える考え方を取り入れることで、図書館の環境づくりを豊かにすることができるのです。

３　サイレントニーズに呼びかける、展示・ワークショップ事例

サイレントニーズを拾い上げ気づきを与えることのきっかけ作りとして、継続的かつ行いやすい方法が展示だと思っています。久美浜高校の図書館は、端にあり忘れられがちな存在です。そこで、まずは図書館の外で図書館の存在そのものをアピールすることが重要だと思い、館外で文庫の展示や特集展示等を行っています。館内では、親しみやすい図書館にするために、入り口付近の床に大事な案内を貼る等、人に聞かなくても最低限のことは理解できるような工夫をしています。次に、図書館は自分にとってどのくらい役に立つのか見えない部分のニーズに答えていく必要があります。そこで、まずは常連となっている利用者のニーズを拡張します。本のリクエストがあった場合や雑談の中で出てきた話題を拾い上げ、それに関連する本を集めて展示をしています。例えば、「聖地巡礼特集」や「文豪ストレイドッグス特集」等を行いました。

自分にとって身近な人やものに関連する本や、気になることに関する本はよく読まれる傾向にあります。そのため、先生のオススメ本や映画・ドラマの原作本コーナー、最近返却された本をまとめたラックを置き、関心のあることについて更に理解を深めてもらえるような展示をしています。また、文字情報に興味はないが知りたいというニーズも存在するため、できるだけ実物の展示を取り入れるようにしています。例えば、食肉解体パズルや顕微鏡を使用した展示、鳴き砂やサヌカイトの展示を行いました。暮らしの中にある学びに気づけるような図書資料への誘いを行うこと、また、会話のきっかけとなるような展示を行っています。

ワークショップとしては、世界の子ども達の肌の色を再現した色鉛筆を用いて自分の肌の色と

比較する、ナポレオン香水の作成、虫よけ・制汗臭スプレーの作成を行いました。また、古典文学に関連したワークショップとして貝覆い（貝あわせ）・組香（香あわせ）体験等を行いました。季節行事ものでは、ハロウィンではジャックオーランタン作り、バレンタインには粘土でチョコレートを作り、作品とともに文化や歴史についての本も紹介しました。このように、様々な文化や背景に実際に触れ、体験を伴った読書をすることにより強い印象として残るので、そこから知識を深めてもらいたいと思っています。また、本とともに「考えさせる材料」も展示することで手に取ってもらえるような本になります。例えば、オリンピック特集では、ある決まりごとに則って本を並べ、その理由と決まりごととは何かクイズ形式にして答えさせました。また、辞典事典展では、辞書で漢字の意味を再確認させ、その意味からイメージした情景をアイロンビーズで描いてもらう、ということも行いました。辞典や事典で言葉の意味を確認することは、探究活動の土台になるので、触れる機会を作るのも学校図書館として大切だと考えています。そして、特に大きな効果があったのは、国立国会図書館国際子ども図書館から協力を得て行った海外の絵本展です。その国の文化的背景を考えさせるアプローチとして想像で翻訳をする「想像翻訳コンテスト」という企画展示を行いました。これ以降、気になった本があると書架に自然と手を出せる生徒が増え貸出しにも繋がりました。

利用者参加型の展示も行っています。利用者自ら図書館作りに関わってもらうことで意識が高まり、また自分で作成した企画展は人に紹介したくなります。内容としては、自分だけの図書館を作る「一箱 Library」や背表紙で詠む「文庫川柳」、生徒が選び本をデコレーションした「本の福袋」等があります。これらは、図書委員の生徒だけではなく、随時希望者を募集して作ってもらっています。この展示では、今まではあまり関心のなかった本を手に取るきっかけにもなっています。その他にも、企業と連携した展示も行っています。

性や心の問題など、テーマによっては一定のニーズはあるが目立たない場所で展示を行ったほうがいい場合もあるため、そのような展示を行う場合は人目につかない場所に常設展示をしています。なぜ常設展示なのかは、興味があってもどこにあるかは聞きにくいため、気づかれずに手に取りやすい場所に置いておくためです。

４　居「場」所としての図書館

本の情報よりも居場所としての図書館を必要としている生徒達もいます。学校という社会の中でそういった生徒を受け入れる場所を考えたとき、図書館だからできることがあります。学校生活の中で一人になりたいと思ったとき、逃げ場にできる場所は案外少ないです。そんな中、図書館の価値というのは「何の目的も負担もなく、居ることができる」ことです。図書館は誰が来ても、良い意味で放っておいてもらえます。そうして逃げ場として図書館に足を運ぶうちに、図書館の様々な知の宝庫の中に自分で問題を解決できるヒントを見つけることができるかもしれません。

誰かに相談するほどではない、または相談できない問題を抱えた生徒が自分で解決を図ったり、リラックスできる場となる。そういった図書館の機能をより充実させていくことが、ダイレクト

ではなくても、学校教育の中で非常に大きな意味を持つのではないでしょうか。
その例として、図書館内に飲食可のスペースをつくりました。学校が居心地が悪いと感じる生徒にとって一番ネックになるのが、昼休み。教室でお昼ご飯を食べるのが苦痛な生徒が一人でいても「ここが良いからここに居るんだ」と堂々と言える付加価値をつけることを考え設置に至りました。
また、このスペースでは日替わりで世界の様々な音楽を BGM として流しています。音楽も図書館が継承することができる時代とともに移り変わる文化の一つです。図書館が読書や勉強以外認めない場所であれば、読書や勉強を好まない人にとってはそこが居心地の悪い場所になり、そこを好む人は読書や勉強が好きな真面目なやつ、とカテゴライズされてしまうでしょう。さらに自分とは違うと感じることで距離を置こうとしてしまいます。図書館で出来ることが多種多様であれば、図書館に来る目的も多種多様になります。図書館に読書や勉強以外の付加価値をつけることで､利用者の利用目的を多彩にすることが､利用者のプライバシーを守ることにも繋がります。

５　ひとりひとりの世界を拓く「窓」としての図書館

一度訪れたら「また来たい！」と思わせる出会いがあってこそ魅力的な図書館と言えるでしょう。多くの人にとって、新しい知識を得たり、できなかったことができるようになることは楽しいことです。利用者が特定のツールに偏ることなく正しい情報・必要な情報を取捨選択できる力を身につけ、知ることの喜びを知り、世界が拓かれることを目指して情報リテラシーの育成に取り組んでいます。

授業で生徒に調べ物をさせるとき、授業者は信頼できる情報を基に学習を進めるよう指導しますが、信頼できる情報とはどうやったら得られるのでしょうか？
何も情報がないところから調べ物を始める場合、大抵の人は Yahoo や Google で検索すると思います。知識があれば専門機関の HP やレファレンス共同データベース等も参考にできますが、それらの役立つ情報が検索してすぐに上位に出てくるとは限らず、図書館や司書が介在しなければ活用することができません。インターネットの場合、複数のサイトで調べたとしても引用元が一緒ということもあります。また、本の情報なら信頼できるといっても、同じ著者の本を読み比べても意味がなく、過去の定説が変わってしまうこともあります。比較できる資料が少ない分野では間違いが発見しにくい場合もあるでしょう。
そのような引っかかりやすい部分に生徒が自分で気づき、自力で必要な正しい情報にたどり着けるようにするために、学校図書館ではただ情報を提供するだけではなく、情報源の信頼性を考えることを促していく必要があります。久美浜高校ではそういった情報リテラシー育成の教材として、生徒に身近なオンライン百科事典の Wikipedia を活用しています。

日本語版の Wikipedia では「情報は、第三者が検証できてはじめて信用される」ことを重要な編集方針としており、信用度の高い記事にはほぼ全ての文章に出典が示されています。そのことから発展して、インターネットのどんな文章を参考にする場合でも、信用に足るだけの情報が一緒に記載されていることを確認する必要性について説明しています。併せて実際に Wikipedia の出典に記載されている本を紹介し、原文と Wikipedia の文章が、内容は同じだが文章の表現が違うことを示すことで、著作権侵害についても理解を深めています。
また逆の発想で、ある事柄を徹底的に調べたいと思ったとき、きちんと出典が明記されている Wikipedia は典拠がページ数まで簡単にわかるレファレンスツールとして機能します。必要な資

料を集めるとき、司書が直接該当の本を提供してしまうのではなく、出典を頼りに生徒が自力で必要な資料にたどり着くことで生徒の情報リテラシー能力が育まれていると思います。

さらに、久美浜高校図書館では実際に生徒が自分の学校や地域の情報について Wikipedia を編集し、発信するワークショップも行っています。図書館の本や新聞などから出典にできる確かな情報源を探し、それを基に著作権侵害にならないように自分の言葉に換えて書く。実際にその作業を体験してみることで、裏付けをとって正しい情報を書く大変さや、誰でも情報を書き換えられることが実感としてわかり、今まで受け取るだけだった情報の裏側を考えるようになります。また、世界中の誰でもアクセスできる Wikipedia に自分の文章が掲載されることは、生徒の自己肯定感を育むことにも繋がっていると思います。

近年､地域の情報を調べて書くウィキペディアタウンのイベントが全国的に行われていますが、地元のそうしたイベントに地域の研究者や一般の方に交じって参加することで、人や社会と繋がるきっかけにもなっています。

Wikipedia を生徒に扱わせるに当たって、まずは司書が仕組みを理解すべく、京都府立高校図書館協議会司書部会丹後ブロックでは､「探究活動を支える情報リテラシー研修」として、Wikipedia 記事の加筆編集・新規作成の研修を行っています。その過程で、司書自らが利用者の立場で図書館を利用してみることで、自館の改善点が見えてくるとともに、探究学習において生徒が躓きやすいポイントに気づくことができます。

６まとめ

様々な目的で図書館を利用する生徒がおり、それぞれ利用の仕方が異なるのは当たり前です。好きなことをして自由に過ごして行く中で、人として自然に成長していける場所が魅力的な図書館ではないかと考えています。学校図書館は学習センターでもありますが、一人黙々と本や教科書に向かうだけが学習ではありません。人と話す中で学ぶことも人生にはたくさんあります。そして、人と話すには相手が必要です。いろんな生徒が自然と集まることでお互いに学び合える。図書館はそういう場所であって欲しいと思っています。

ワークショップ「ぐるぐる読書会」

ぐるぐる読書とは、本を時計回りに隣の人に渡し、本の「表紙」「裏表紙」「目次」「あとがき」だけを見て、その本に答えが書いてありそうな質問をひとつ考えます。その後、２０分間の読書タイムを設け、もらった質問への回答、本の紹介ができるように読書をします。次に、自分の本について質問の答えも交えながら５分間プレゼンを行います。その後、２分間の質疑応答や感想タイムとなります。適正人数は４～６名とされています。今回は、６名のグループで、プレゼン時間を３分、質疑応答・感想タイムを１分に変更して行いました。伊達氏からは､「テーマを絞って行うほうが実施しやすい場合もある」とのアドバイスをいただきました。

２－２　分　科　会　報　告

分科会名	第2分科会
日時	令和2年1月30日（木）13：30～16：30
会場	群馬県立図書館　3階　研修室
テーマ	リポジトリ JAIRO Cloud 移行ワークショップ
開催趣旨	第5期科学技術基本計画において、オープンサイエンスの推進体制の構築が求められており、国立情報学研究所からリポジトリシステム「新 JAIRO Cloud」が 2020 年秋に提供される予定である。新システムへの対応を見据え、現在、県内大学等 20 機関が参加する「群馬県地域共同リポジトリ AKAGI」は 2021 年度末をもってサービスを終了し、今後は各機関においてリポジトリの構築が必要となる。 第２分科会では、JAIRO Cloud にてリポジトリを構築予定の機関を対象に、リポジトリを取り巻く最新動向の紹介と、現行システムからの移行作業を学ぶワークショップを開催する。県内各機関のリポジトリ担当者と共に学び情報共有することで、不安を軽減しスムーズな移行作業につなげたい。
日程・内容	13:30～13:45　講演 「オープンサイエンス，次期 JAIRO Cloud の状況について」 安達修介氏（ｵｰﾌﾟﾝｱｸｾｽﾘﾎﾟｼﾞﾄﾘ推進協会人材育成作業部会・横浜国立大学） 13:45～16:30　ワークショップ　（15:10～15:20　途中休憩） 「JAIRO Cloud 移行作業デモ」 下城陽介氏（ｵｰﾌﾟﾝｱｸｾｽﾘﾎﾟｼﾞﾄﾘ推進協会人材育成作業部会・上越教育大学）
参加者状況	合計 34 人（一般参加 16 人、講師 2 人、スタッフ 16 人）
係分担	講師：安達修介氏・下城陽介氏 司会：山内（群大） 受付：井上（草津町）・高橋（渋川市）・外丸（中之条町）・山田（甘楽町）・吉澤（富岡市） 記録：山谷（藤岡市）・清水（高崎健福大） 写真：黒﨑（前橋市）・田中（安中市） 会場：田村（高崎市）・奥原（県立）・侭田（県立） 接待：織田澤（沼田市）・齊藤（玉村町） 連絡調整：井田（県立）
配布資料	・オープンサイエンス，次期 JAIRO Cloud の状況について ・移行の手順説明　・移行デモの流れ
評価 反省 その他	・アンケートでは、移行作業のデモにおいて、具体的な作業の流れやイメージを掴むことができ大変参考になった、との意見が多数寄せられた。 ・県外の研修へ出向くことが難しい図書館職員にも喫緊の課題に対する研修機会を提供でき、有意義であった。

第 2 分科会　リポジトリ JAIRO Cloud 移行ワークショップ
講演「オープンサイエンス，次期 JAIRO Cloud の状況について」
安達修介氏（JPCOAR 人材育成作業部会・横浜国立大学）
１３：３０～１３：４５

ただいまご紹介に預かりました、横浜国立大学の安達と申します。
オープンサイエンスと次期 JAIRO Cloud の状況についてということで、お話をさせていただきます。

それではさっそくまずオープンサイエンスの状況についてお話をします。（スライド３）近年よく聞かれるようになったオープンサイエンスですが、オープンサイエンスというのは、まず一体どういうものなのでしょうか。ということで、NII のオープンサイエンス基盤研究センターの web サイトと、それから東京大学附属図書館がかつて発行した「オープンアクセスハンドブック」というものから、オープンサイエンスについての説明をここに持ってきてみました。どちらも書いてあることは大体同じで、オープンアクセスの範囲を広げるものであるけれど、定義はまだ定まっていないということを言っています。

オープンサイエンスはどのようなものかというのは、明確にはなっていないのですが、主に研究データのオープン化について話されることが最近多いと思います。研究データのオープン化については、FAIR 原則というものが公表されていまして（スライド 4)、これは研究データの流通や活用を促進している FORCE11(フォースイレブン)というところで公表されたものなのですが、「見つけられる(To be Findable)」、「アクセスできる(To be Accessible)」、「相互利用できる(To be Interoperable)」、「再利用できる(To be Re-usable)」の英語の頭文字を取った原則で、データの適切な公開方法を示す原則の一つです。

オープン化の焦点は、研究成果である発表論文のオープンから、その前段階である研究データに移ってきていると言えます。（スライド 5）研究データをなぜ公開するのかといいますと、2014 年に某細胞などの騒動もありましたが、それらを受けて研究の公正さを保つことが求められています。研究データを公開することで、研究成果を検証し、研究を再現可能

とすることが必要になってきていて、すでに研究費の助成の条件として、研究データの適切な公開を掲げている機関も出てきています。適切な公開を掲げているという風にスライドには書いたのですが、より正確に言いますと、データマネジメントプランの提出を求められているということです。例えば、日本医療研究開発機構や、科学技術振興機構などが、研究費の助成の条件としてデータマネジメントプランの提出を求めているということです。

また、研究データ公開の意義として、この図（スライド 6）をどこかでご覧になった方もいらっしゃるかもしれないのですが、研究の公正さを保つだけでなく、色の変わっている公開・再利用というところで強調させていただいたのですが、同じ研究データを使うことで別の研究をして、新たな成果が生み出されることも期待されています。このような意義から、研究データの公開が近年求められるようになってきています。

また、オープンサイエンスの一つの形態として、市民科学、シチズン・サイエンスというものも最近言われるようになってきています（スライド 7）。先ほどからお話をしていましたオープンアクセス、オープンデータの情報源のオープン化に加えて、最近流行りのクラウドファンディングなどで資金源をオープン化したことにより、市民が学術研究に関わる機会が拡大しています。黒ポチの三つ目に「非専門家」という言葉が書いてあるのですが、これは 2019 年の 10 月 24 日の SPARC Japan セミナーで東京大学の地震研の加納先生が特に強調されていたことなのですが、その研究に・・・研究者でない方は決して部外者であるとか、素人であるとかいったことでなく、専門でない、非専門家であるというだけで、その非専門家の方が参加しやすいように整備することで専門家も研究がしやすい環境が整うし、担い手も増え、研究の裾野も広がっていくということで、研究が広がっているということが言えるようです。

市民科学の事例として、左の「みんなで翻刻」というように、まだ翻刻をされていない古典籍を色々な人が翻刻をしたり、右側は「Zooniverse」というアメリカのプロジェクトで、一つの分野に関わらず、様々な分野で非専門家が知識や研究を寄せ合って、研究を進めているというようなプロジェクトがあります（スライド 8）。また、研究活動だけでなく教育活動もオープン化が進んでいます。「MOOCｓ」や「Open Educational Resources」などといった技術の発展や、「オープンアクセスデジタル教科書」というものの販売もされています。下に出ているのは「Coursera」というアメリカの教育活動オープン化の事例なのですが、これはスタンフォード大学のコンピュータサイエンスの教授が中心となって立ち上げたプロジェクトで、スタンフォード大、ミシガン大、ペンシルベニア大、プリンストン大が最初、講義をここにオープンにして、2013 年頃から、日本から東京大学なども講義をここに掲載するなどして、修了証明書なども発行される、オープンな講義が受けられるサービスとなっています（スライド 9）。

このように、オープンサイエンスが進む中で図書館にどのようなことが期待されているかということですが、まず、研究データの適切な管理が期待されています。実際にデータ管理の依頼が来ている事例もあると聞いていて、時には数百 GB から数 TB のデータ管理を頼

まれることもあったようです。さすがにデータ容量が大きすぎるので、それはお断りしたという話を聞いたのですが、これからもっとそういう事例が増えていくと思われます。

また、研究データを適切に管理するだけでなく、適切な公開や流通促進をすることも求められてくると思います。流通促進には機械に読んでもらうことが重要で、適切なメタデータを付与したり、キュレーションなどをするなどをして、データを収集するシステムに収集をしてもらうようにすることが大事です。また、教員の中には先ほどスライド 6 枚目でお話ししたように、自分が使わなかった・使えなかったデータを公開して、そのデータを使って研究してもらうことで新たな研究成果が生まれることを期待している方もいらっしゃいます（スライド 10）。

さらに、先ほどの市民科学という話題に関連して、オープンな研究の環境整備も図書館は貢献できると思われます。情報インフラの構築や維持にはある程度のノウハウがあるため、重要な役割を果たすことが見込め、また研究者の方の中にはそういった役割を果たすことを期待されている方もいらっしゃいます（スライド 11）。

それでちょっと宣伝なんですけれど、JPCOAR はそうしたオープンサイエンスに寄与するためにコンテンツの流通促進として、リポジトリの新しいメタデータのスキーマを提案したり、広報活動を行ったり、また研修会を開催したり、研究データマネジメントのトレーニングツールを開発するなどして、新たなオープンアクセス、オープンサイエンスを促進しようとしています（スライド 12、13）。

次に次期 JAIRO Cloud についてお話をさせていただきます（スライド 15）。JAIRO Cloud というのは 550 以上の機関にリポジトリ環境の提供を行っているクラウドサービスで、DSpace の次期システムと言うことが出来ると思います。今使っているのは WEKO2 という環境なんですけれど、2020 年の 10 月に次期システム WEKO3 への移行を予定しています。これは DSpace から JAIRO Cloud への切り替えとは違って、JAIRO Cloud を使っている機関はすべて自動で移行がされる予定になっています。これは研究成果の共有から活用を目指すためのリプレースになっており、2019 年 9 月から 12 月にかけて、JPCOAR のコンテンツ流通促進作業部会を中心として、新しい WEKO3 の環境を実際に使ってみて、移行実証実験を行って、新環境の機能の検証やブラッシュアップをしました。

次期 JAIRO Cloud の特徴としてまず挙げられるのは、操作性の向上です（スライド 16）。主に大きな特徴として挙げられるのは、このワークフロー機能とウィジェットによる画面デザイン機能だと思うのですが、ワークフロー機能に様々なコンテンツタイプの登録のた

めのフォーマットテンプレートを用意して、アイテム登録のための作業を簡便化したり、ウィジェットに、画面右側に出ている画像のようにブロックで表されたリポジトリ画面上のアイテムを移動させることで、リポジトリトップページなどのデザインを簡単に出来るようにしています。

また、オープンサイエンスが進んで、オープン化する情報が多様化してきたことに合わせて、柔軟なメタデータ表現を確保して、様々なメタデータを作れるようにしたり、大容量のアップロード・ダウンロード機能を用意したり、更に JPCOAR スキーマ、新しいメタデータスキーマに今までの WEKO2 の JAIRO Cloud では対応していなかったのですが、新 JAIRO Cloud ではそれを対応できるようにしています（スライド 17）。

それで、3 月 6 日に次期 JAIRO Cloud の説明会が予定されています。東京の国立情報学研究所で行われるので、移動の距離があるかもしれないのですが、動画配信、公開も予定されていますので、ぜひ JAIRO Cloud を使われている機関の方、JAIRO Cloud に移行する予定の機関の方はお聞きになると良いのではないかと思います。

ということで、私からのお話は以上で、最後に参考資料をご紹介させていただきます。上二つがオープンサイエンスの状況についての参考資料で、下二つが次期 JAIRO Cloud についての参考資料です（スライド 20）。

今日、行きの電車の中で確認をしたんですけれど、1 月 30 日時点ですべてオープンになっていますので、特に JAIRO Cloud、次期 JAIRO Cloud については、参照されるとご参考になるのではないかなと思います。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

第２分科会　リポジトリ JAIRO Cloud 移行ワークショップ
ワークショップ「JAIRO Cloud 移行作業デモ」
下城陽介氏（JPCOAR 人材育成作業部会・上越教育大学）
１３：４５～１６：３０

引き続き移行についてのお話をします。先ほど次期 JAIRO Cloud というものが出てきましたが今お話しするのは今皆さんが使っている群馬県地域共同リポジトリの DSpace から古い JAIRO Cloud へ移行するお話です。そこから新しい JAIRO Cloud へ移行するという２段階の手順が皆さんには必要になります。今回は第一段階のお話です。１５分程度で１枚目の紙を使って解説します。

DSpace から JAIRO Cloud への移行の手順説明です。詳しくは JAIRO Cloud コミュニティサイトにマニュアル類が整理されていますのでそちらをご覧ください。
移行の実際ですが、６工程の作業が必要になります。まずはマニュアルの読み込みですが、これは皆さん必ずやらなければいけません。①～④は群馬大学さんがやってくれているので、あとの⑤メタデータのマッピングと⑥本番用データの一括登録が、皆さんがやる必要があることです。もし DSpace から JAIRO Cloud に移行しない機関があれば今回の話はあまり関係がないかもしれませんがお付き合いください。

まずマニュアルの読み込みなのですが、私は１か月くらいの時間をかけて読み込みました。初めは理解できませんでしたが、読み進めていくうちに作業工程は６項目くらいしかないことに気付きました。

⑤のメタデータのマッピングから説明します。メタデータのマッピングというのは DSpace のメタデータ項目と JAIRO Cloud のメタデータ項目を結びつけるという作業です。この作業はテストデータを使ってどの項目とどの項目とが結びつくのかを確認しながら行

います。
その次にそのマッピングしたものを全て Sword Client for WEKO（スウォードクライエントフォーウェコ）というソフトを使って実際のリポジトリに一気に登録していきます。
どのようにやるかというとまず Excel でどの項目とどの項目が結びつくのかという表をあらかじめ作ります。その次にフィルタの設定というのが必要になりまして、さっき Excel で作った表を見ながら JAIRO Cloud の項目に DSpace の項目を入れていくという作業が必要になります。

群馬大学さんが今の群馬県地域共同リポジトリから取り出したデータというのがあり、そのデータの加工というのも必要になります。皆さんが地域共同リポジトリに入れたデータというのは間違っているデータもあり、それを間違ったまま新しい方に入れてしまうと間違ったまま入ってしまうので、その間違いをここであらかじめ直しておきます。Excel でできるので結構簡単にクリーンなデータにできます。
（スクリーンに映した Excel ファイルを使って解説）
この表を見てもよくわからないと思いますが、分からなくても移行はできますので参考程度に見ておいてください。

実際にこれからデモ作業をやります。ここからは（パワーポイントの）スライドは映さないので手元の紙を見てください。前の画面で実際にやってみます。
今回のものは皆さんが大学に持ち帰っても使えるように、必要ないところも記述してあるのですが、詳細な移行の手順は先ほど紹介したコミュニティサイトで確認してください。
今からデモを行うのですが、分からないところがありましたら適宜挙手をして質問していただければと思います。よろしくお願いします。

本日のデモの流れなのですが、まず Sword Client for WEKO という一括登録されるプログラムをウィンドウズのパソコンにインストールします。２番目に DSpace から WEKO2、旧 JAIRO Cloud のマッピングと Excel の表を作るというのをやります。３番目に Excel データをきれいにします。４番目にフィルタというのを Windows パソコンに登録してそれを修正するというのをお見せします。５番に実際にデータを移行して、６番に移行したデータを確認するというのを今回やります。ここまでで何か質問はありますか。なければこれから作業を始めます。

まず Sword Client for WEKO というものが何かわからない人はいますか。（数人挙手）これは何かというと、一括登録するためのプログラムです。なぜこれが必要かというと、群馬大学さんでは 8,000 件くらい共同リポジトリに入っているのですが、それを一件一件登録するのは現実的ではないので、それを一気に登録するためのシステムがこの Sword Client

for WEKO というものです。

（以下、デモの流れと概要、質疑）

Sword Client for WEKO の最新版をサイトからインストールする。インストールの際は解凍先など変更する必要はなく、次へ次へと進んでいけば OK。（zip ファイルをダウンロード→解凍→インストーラーをクリックしてインストール）ID とパスワードが必要になるが、JAIRO Cloud 事務局から送られてくる。

DSpace から WEKO2 へのマッピング表を作る。
マッピングというのは DSpace のメタデータ項目（タイトルや著者など）と WEKO2 のメタデータ項目を結びつける作業である。

metadata.tsv というファイルを群馬大学から送付するので受け取る。それを Excel で開く。Excel で作業するときはすべて文字列にする必要がある。マッピング表は NII の JAIRO Cloud のページからインストールできる。

【質問】

Q1. 何を言っているのかわからない。

A1. 群馬大学からもらったデータの中に今の共同リポジトリのデータがすべて入っている。移行するにはデータがないと移行できない。その移行するデータを群馬大学がくれる。

Q2. マッピング表が何を意味しているのかわからない。

A2. 共同リポジトリのデータと JAIRO Cloud のデータを繋げるための表。これを使って新しい JAIRO Cloud にメタデータを入れる設定を行う必要がある。今やっている作業は新しい JAIRO Cloud にデータを移す前の準備作業。

※群馬大学からの補足

metadata.tsv は 1 行に 1 論文、1 列に 1 種類（著者・題名など）のデータが入っている。また、1 行目には項目名が入っている。この 1 行目の項目名を見てそれぞれの種類のデータが移行先のどこに入るのかを確認し、修整が必要な個所を修整する、という作業をしている。

自分が作ったマッピング表を群馬大学に渡しておくが、内容が間違っている可能性があるのでよく確認して訂正してほしい。

DSpace にあって JAIRO Cloud にない項目というものがある。例えば DSpace には「スポンサーシップ」という項目があるが、JAIRO Cloud にはない。「引用」などもない。このような項目があったら自分で作って追加しなければならない。

metadata.xlsx には間違っているデータも入っているのでこれを修正する。この作業を Excel データのクレンジングという。

例えば

・データが入っていない列があったら削除する。

・アドバイザーのところに著者名が入っていたら著者名の項目に移す。

・著者名のところに著者名漢字・著者名仮名・著者名英語などが入り混じっていたら分ける。

著者の欄に「群馬大学」というように団体名が入っていることがある。この団体名を「群馬」が姓で「大学」が名というように判断してしまうことがある。コンマを入れるとそこで姓と名を分けるようになっている。団体名の場合は最後にコンマを入れると誤った場所で分かれてしまうのを防げる。

Excel のリプレイス関数を使って POS_INDEX を削除する。POS_INDEX とはコミュニティごとに付与されているもので、今は不要なもの。「〈！--000--〉●●大学（●●university)」という形をしている。

ここまでの作業が終わったらいよいよ一括登録を始める。

フィルタをドライブの所定の場所にセットする。フィルタを入れるフォルダは隠しファイルになっている。フィルタは WEKO のページからダウンロードできる。

初めにフィルタ更新という作業が必要になる。JAIRO Cloud のフィルタというものがあり、本体とフィルタの項目が若干違う。更新すると同一になり、枝番のようなものがつかなくなる。

【質問】

Q3. フィルタを入れる意味を教えてほしい。

A3. フィルタを通して JAIRO Cloud にデータが行く。フィルタを入れないと移行できない。そのフィルタを編集することで正しくデータが移行する。

Q4. マッピング表とフィルタの関係を教えてほしい。

A4. Excel でマッピング表を作ったが、この Excel の表を用いてフィルタを編集する。マッピング表はフィルタの編集をする前段階

Q5. （DSpace にあって JAIRO Cloud にない項目は）JAIRO Cloud に新たな項目を作る

のか。
A5. そう。あとでその話をする。

Q6. フィルタはどこから持ってくるのか。
A6. ネットから持ってくる。JAIRO Cloud の移行マニュアルに載っている。

Q7. Excel データのクレンジング作業をフィルタを通す前にやるのは移行しやすくするためか。
A7. そう。移行前にデータがきれいになっていると移行後もきれいになっている。

Q8. 資料の４の「セットして編集して更新する」というのを短時間でできるなら教えてほしい。
A8. スクリーンを使ってもう一度やる。

フィルタの編集をする。これの工程はすべてマニュアルに載っているのでメモを取る必要はない。最初に Excel で作ったマッピング表をフィルタに入れ込む。このときにタイトルが著者の欄に入ったりしてしまわないように注意する。DSpace にあって JAIRO Cloud にない追加の項目は「行を追加」で足す。

【質問】
Q9. 少し戻るが、マッピングのデータは群馬大学からもらえばいいか。
A9. メタデータは群馬大学が用意する。マッピング表とフィルタはネットから。マッピング表も群馬大学が作って配ると早いかもしれない。大学ごとに使うデータ・使わないデータが異なるので今後相談。

（１０分休憩　個別に質問対応。）

フィルタ編集の続きから。DSpace には紀要・学術雑誌・学術雑誌論文・報告書などの色々なアイテムタイプがある。フィルタはこれらのアイテムタイプごとに別々に作成・編集しなければならない。紀要と学術論文はほとんど同じだが、会議発表用資料には開催日や開催場所という項目がある。ひとつずつ慎重に見てほしい。

群馬大学での移行を実際にやってみる。

移行の最中には error と warning が出ることがある。前者がでると移行ができず途中で止まる。修正しないと先に進まない。後者は注意のメッセージを処理すればそのまま移行を続けることができる（配布資料「おまけ」参照し、error と warning が出たときの対処法を解説）。こういったものはメッセージが出ないとなかなか気づかないが、できるだけ減らせ

るようにデータのクレンジングをしっかりとやっておくべきである。
1,800 件ほど移行しているとタイムアウトすることがある。1,000 件ずつ程度に区切ってやるとよい。また、今日の作業では PDF は入れていないが、PDF を入れる手順を踏めば PDF も移行できる。

【質問】
Q10. Excel のメタデータをいじれば移行後にデータが入る先を変えられるか。
A10. 変えられる。すべての変更を Excel の編集で済ませるのが一番きれいに仕上がる。

Q11. まったく新しい項目を作っても大丈夫か。
A11. 大丈夫。DSpace と JAIRO Cloud の項目が同じである必要はない。

（これまでのおさらい）

【他の大学図書館への質問】
Q12. 大学院の博士論文の受付は図書館がやっているのか、総務課などがやっているか。
A12-1. 群馬大学は各学部の教務が窓口。集めたデータが図書館に来る。
A12-2. 上越教育大は兵庫と連合大学院になっており、兵庫が取りまとめている。連絡は教務からされ、論文をアップロードするサイトの管理は図書館がやっている
A12-3. 横国大はルートが分かれている。提出は各大学院の教務へ行く。ファイルを学内の共有サーバーにアップし、本部の教育系のところにアップしたという報告をする。同時に、大学院から図書館にこれらの人たちが修了した、登録をお願いしますという書類だけが届き、データのアップロードが完了した、という連絡は本部から届く。そこで初めて申請書とファイルがそろって、図書館で登録作業ができ、完了したという通知を本部と大学院にして完了、という流れ。

【質問】
Q13. PDF ファイルを入れるにはどうするか。
A13. 今は群馬大学から PDF ファイルをもらわなかったのでやらなかったが、同じ手順でできる。ただし、メタデータを入れるのと同じフォルダに入れないとエラーが出る。PDF を入れる場合にも 1,000 件までならタイムアウトはしないと思われる。

Q14. JAIRO Cloud の本体の更新において左側のインデックスツリーを作るのは簡単か。メタデータでスラッシュを入れるとフォルダができるのか。
A14. そう。フォルダを作るのは簡単。インデックスツリーはツリー編集という機能から作れる。

JAIRO Cloud を使うためには NII に申請しないといけない。旧 JAIRO Cloud の稼働している期限が迫ってきているのでその申請をなるべく早くしてもらいたい。ID とパスワードをもらい、移行できる環境が整うのに１か月くらいかかる（2 か月はかからない）。9 月までに移行しないと新しいほうに移行できない。申請自体は簡単。

【質問】

Q15. 移行できる環境が整うのに申請から 2 か月くらいかかるというが、メタデータをもらうのにはどれくらいかかるか。

A15. （群馬大学回答）依頼をもらってから１，２日でできる。

Q16. 3 月 6 日の次期 JAIRO Cloud 説明会は、旧 JAIRO Cloud へ移行せず 10 月以降に新 JAIRO Cloud を利用する予定のため、参加しなくてもよいか。

A16. 3 月は現 JAIRO Cloud から新 JAIRO Cloud へ移行（自動移行）する機関への説明会であるため、参加しなくてもよいと思う。いきなり新 JAIRO Cloud を導入する機関は、今年 12 月頃に予定している操作説明会へ参加されるとよい。

（以上にて終了、解散）

参加者の声（アンケート結果）

図書館大会に参加した方々から、御意見をいただきました。なお、ご意見は紙面の都合で編集してあります。

（1）記念講演について

○個人として、書き手として、利用者として図書館への様々な考え方を聞くことができてよかったです。内部にいるだけでは気が付かない利用者が求めていることの多様さに驚きました。もっと外へ出て他者の考えを聞きに行きたいと思いました。

○図書館には予算が必要。予算を獲得する行政マンとしての図書館員の育成という言葉が印象に残った。どうしても数字を基に交渉しがちだが、図書館を知ってもらう努力なのだと目を開かされた。

○図書館人の基本は、人間力で決まる。寄付を募る行政センスのある人間を育てる、など刺激的な内容で大変勉強になりました。

○「貸出冊数、利用者数だけでない尺度を」作家、出版社、市民と図書館、いろいろな立場で図書館と関わる方の貴重なお話を伺えて大変ありがたかったです。

○図書館を外側から観られる良い機会になりました。もっと多くの方に図書館の良さ、楽しさ、便利さを知ってもらいたいと改めて感じました。

○おとどい永江さんの講演会があることを知り、ワクワクしながらやってきました。「そうだ、京都に住もう」という文庫本を５年前に読んでから永江さんにお会いしたいと思っていました。思った通り、ためになるお話が聞けたのでとてもうれしかったです。

○書き手側から見た図書館の存在について知ることができ、これからの図書館の在り方について考えさせられた。紹介された映画と本も興味深かった。

○市民と図書館、出版社、それぞれの視点からの思いというものを考えさせられます。

○永江先生の視点での書き手・出版社・市民と図書館との関わりについて、とても面白く聞かせていただきました。それぞれの立場はあるかもしれないけれど、利用者と図書館が一体となって作り上げられる新しい図書館ができたらよいと思いました。

○普段図書館員として勤務するなかで、書き手・利用者・書店などさまざまな立場の方における考え方を改めて考えました。居場所としての場にもなっている反面、周知が難しい部分もあるので、対応できる範囲を含めて再度考えていきたいと考えました。新たな知識が増えました。ありがとうございました。

○労働力人口と本の売れ高に関係があるとは驚きでした。図書館の未来に明るい兆しが見えました。

○出版と読者と書店と図書館、それぞれの視点で読書を取り囲む現状をお話しいただけ、本との付き合いや、これからの図書館サービスをどう考えるべきかについて考えるきっかけやヒントをいただいたような気がします。

○図書館に関していろいろ思いめぐらせていたことをすべて言葉にしていただき、頭がすっきりいたしました。学校司書としてこれからも頑張っていきたいです。

○出版社や書店の思い、事情などなかなか聞くことのない声を紹介していただいてよかったです。司書はＡＩにできるか、との問いに対して、「できない」と言い切ってくださったのが嬉しかったのとともに、ＡＩにはできない、司書としての役割を果たすために、資質向上に努めなければと思いました。

○図書の発行や購入をいろいろな角度から分析され、自分が抱いていた概念が違っていたことに気付き、面白かった。

○大変良かった。図書館に協力します。

（2）第１分科会について

○Library of the Year 2019 で、学校図書館として初めて優秀賞を受賞した久美浜高校の伊達深雪さんの取り組みが伺えるのでとても楽しみにしていました。とにかく図書館に来て欲しいという伊達さんの熱意が伝わってきた講義でした。たくさんご紹介いただいた事例は、どれも取り組んでみたいと思える事例でとても参考になりました。実践してみたいと思います。

○図書館ができること、可能性が広がりました。たくさんの実践例を紹介していただき、自館でもできることを取り組んでいこうと思いました。ぐるぐる読書会、楽しかったです。

○何もかもが、目から鱗。知っているけどその先に進めない私でしたが、同じ一年なら何かをやった一年にしたいなと思いました。

○大変盛りだくさんで、実りのある分科会でした。今日参加できてよかったです。

○楽しい学校図書館、行ってみたいです。私も学校図書館に関わるものとして参考になることがたくさんありました。ありがとうございました。

○ワークショップ、とても楽しかったです。学校で実践したいと思います。

○たくさんの事例を見せていただき、とても参考になりました。「場」をつくるために今後の業務の参考にしたいと思います。

○展示＝本に限らない様々なワークショップがあり、本当に楽しそうな図書館でした。聞いたことのない実践が多くあり、驚きと感心の連続でした。ぐるぐる読書会、面白かったです。読んだことのない本の内容を想像して話す会はしたことがあるのですが、質問を考えるというのが新しく、20分間集中して読めました。学校でぜひ取り入れたいです。

○伊達先生のパワフルなお話、とても勉強になりました。子どもたちに図書館の魅力を教えるための工夫、本当に素晴らしいです。ぐるぐる読書は中身が濃いですね。

○魅力的な図書館づくり、参考になりました。ありがとうございました。また機会があったらその後のことを聞きたいです。

○講演、読書会、ともに大変参考になりました。読書会は大変でしたが、体験することに価値があったと思います。今後の学校の図書館活動に生かせればと思います。

○まさに「アイディアの泉」ですね。魅力ある図書館にするためには、資金の重要性はそれほど高くないのだなと思いました。背中を押していただきました。ありがとうございました。

○魅せる図書館の講演は素晴らしかった。学校図書館で利用者に興味をもたせる、その背景を探るなど、図書館が与える役割の大きさに圧倒されました。発想を変えた取り組みに大きな理念の裏打ちがあったことに感動しました。

○とても参考になりました。アイディアがとても豊富で、実際にできる行動力。私も頑張ろうと思いました。

○「気づき」の宝庫のようなお話でした。「暇があれば行きたくなる場所にする」ということは学校図書館だけでなく、公共図書館でも当てはまる含蓄のある言葉だと思います。あの手、この手、マネさせていただきます。

（3）第２分科会について

○参考になる話が多かったです。ありがとうございました。

○職場では、取り扱いがない登録だったので、戸惑いましたが、理論は理解できました。裏方の仕事を知ることができてよかったです。

○資料を読んでいるだけではわからなかったことが見えてきて勉強になりました。

○JAIRO Cloud 移行をする手順がよくわかりました。

○役員として参加しました。仕方ないですが、公共図書館には全く関係ない内容で、運営の方法（役員の決め方や分担）を見直してもらいたいです。

○移行手続きについてわかりやすく説明していただき、理解することができました。

〇たっぷりと時間があったので、詰まることなく理解ができた。
〇今後の作業に向けて役に立つ内容だった。
〇大変丁寧な説明でよくわかりました。ありがとうございました。
〇実際にやってみないと分からないことが多そうだと感じた。
〇現在課題となっているテーマであり、とても役立ちそうです。
〇今後、移行をどのように進めるか悩んでいたので、こういう機会を設けていただいてありがたかった。
〇わかりやすく説明していただきましてありがとうございます。不安が少し軽くなりました。
〇とても参考になりました。わかりやすく説明してくださりありがとうございました。
〇移行デモを見せていただいて、何とかできそうな気がしてきました。マニュアルを読むだけではつかめないイメージをつかむことができて助かりました。
〇実際にワークショップを経験したことで、楽しく学ぶことができました。

（4）全般（大会全体、記念講演や分科会）について

〇初めて参加しましたが、30分の式典も内容がスムースで、表彰など楽しく見ることができました。
〇素晴らしい図書館大会ありがとうございました。
〇講演も分科会も充実の内容で満足です。お疲れ様でした。ありがとうございました。
〇大変勉強になる大会でした。係の方々に感謝します。お世話になりました。
〇3回に渡っての県立図書館での学びは本当に為になりました。今後の仕事の指針になります。ありがとうございました。
〇お昼が1時間半あるので、ゆったりしていてありがたいです。
〇来賓の挨拶の中に素晴らしい話がいくつもありました。
〇大変良い時間を過ごすことができました。
〇図書館について様々な考えの方が集まった。とても温かい大会だったと思います。
〇皆様、熱心に取り組まれていて、講演会の内容もびっしりメモしている様子が見て取れました。
〇とても勉強になりました。紹介していただいた映画、本、読んでみたいと思います。

（5）今後取り上げてもらいたい企画（記念講演講師、分科会の講師・テーマなど）

〇他県での取組比較や災害がおきたときの資料管理について
〇高齢者の方への読み聞かせ活動をされている方のお話。おすすめリストなど教えていただきたい。
〇子供向け絵本を卒業してから大人向けの本の間の本のえらび方や考え方。
〇理科読の講演とワークショップ。
〇図書館とSDGsとの親和性という観点から模索する図書館サービスについて考えるような企画。
〇児童書の作家さんのお話が聞きたい。
〇レファレンス演習。
〇「読んでみたい」と思わせる文を書くレッスン。
〇除籍・寄贈本の扱い。
〇資料の修理を実践で。（製本もしてみたい。）
〇参加しやすい読書会のヒントなどを教えていただきたい。
〇県内に数ある図書館での新時代（令和）に向けて、独創的な活動の報告をしてもらいたい。
〇全国ですばらしい魅力的な図書館の活動を紹介してくれる講師を呼んで欲しい。
〇声優を呼んで読み聞かせをしたらどうなるかとか、革新的なイベントを企画してもらいたい。

第17回　群馬県図書館大会　報告書

発　行　日：　令和２年３月

編集・発行：　群馬県図書館協会©